



このまちの成り立ち

吉田町は、暴れ川と呼ばれた大井川が山地から低地に移り、流れがゆるやかになる所に土砂などの堆積物が積って出来た扇形の地形である扇状地の上に、先人たちが長い時間の流れの中で汗を流して営々と築き上げたまちです。

本町の地形を高いところから見下ろせば明瞭に見てとれますが、北は島田から西は牧之原から延びた台地が小山城・能満寺のところで終わっています。大井川は出水期に北からこの台地

にぶつかって渦を巻きながらなめるように蛇行し、東南に向きを変えて駿河湾に流れ込み、渇水期には一面に河原が広がる光景が見られたのではないのでしょうか。

小山城を訪れますと、1階に北・西から延びてきた台地の先端に小山城が築かれた往時をしのばせる模型が置かれています。その模型を眺めますと、北側に大井川が流れている様子が見

て取れます。能満寺の東側を南に伸びる県道島田吉田線は昔は大井川の堤防だったと聞いたことがあります。が、模型を見てみると確かにそうだなと合点がいきます。

能満寺の東側の県道島田吉田線が昔の大井川の堤防であれば、現在の大井川の堤防に至るまでの土地の大半は昔は大井川の流域であり、その流域にあつて海抜が高く、大井川の流れにのみ込まれなかった所が小山高島、高畑の地名で呼ばれている場所であることもなるほどよく分かります。

これまで私がこのまちの地形の成り立ちについてお話ししたことがおおむね間違っていないとすれば、本町の大半の土地は昔は大井川の流域であり、渇水期に河原であつた所を先人たちが長い時間を掛けて少しずつ開拓して出来上がったまちだということが理解できるとともに、先人たちのその苦労が並々ならぬものであつたことがしのばれ、自然と頭が下がります。

まちづくりの臨境界点

このまちの明治期、大正期、昭和初期までのまちづくりを今に伝える資料は限られており、なかなかこれといった形で分かりやすくお伝えすることはできませんが、大井川の河原を艱難辛苦を共にして切り拓いた先人たちの子孫である私たちの曾祖父や曾祖母たちが一生懸命まちづくりに励んだことは論をまちません。

まちづくりを核分裂に例えれば、このまちのまちづくりの核分裂が持続的に進行を始める境目、すなわち臨境界点は町民の皆さんももうなぞっていただけだと思いますが、東名高速道路の開通であり、東名吉田インターチェンジの開設ではなかったでしょうか。東名高速道路の開通と吉田インターチェンジの開設はまさにこのまちの一時代を支えた養鰻業の衰退期と重なる時期であり、養鰻池の跡地などが富士フィルム(株)、オ

東日本大震災を契機とするまちづくり

これまで何度となく町民の皆さんにお話ししてきたことですが、東日本大震災を境目として危急存亡に陥つたこのまちのピンチをチャンスに換えるべく、国

カモト(株)、ソニー(株)、日本ハム(株)といった企業の進出によつて工場用地に変わつていく時期でもありました。

この時期の少し前に榛南幹線、昭和59年に東名川尻幹線といったこのまちの背骨となる幹線道路が計画されました。私の前任者である三輪町長、柳原町長、中村町長は道路網の整備に意を注ぎ、尽力されたことは言うまでもありません。私も先輩の町長にならい、榛南幹線、東名川尻幹線の整備に意を注ぎ、榛南幹線には本町の工区を設定し、まちの予算から整備財源を投下してきました。そのかいあつて榛南幹線も東名川尻幹線の一部もそれぞれ昨年中に開通に至つた次第です。

町長からのメッセージ 121

まちづくりの視点と狙い



このまちのまちづくり

このまちの成り立ちからこのまちのまちづくりを推し量れば、この地に生きた先人たちが大井川の渇水期に少くもつ居住地と農地を広げてきたその先に現在のまちの姿があることが理解できます。

隣の牧之原市の歴史的な成り立ちと比べるとよく理解できることは、牧之原市の前身である相良町や榛原町では先人たちが住みついた当初から居住地や農地にする土地が確保され、土地をどのように居住地や農地にしていくのかを中心にしたまちづくりが進められたのではなかったのでしょうか。本町の歴史的なまちづくりは牧之原市のそれとは大きく異なり、暴れ川と呼ばれた大井川とのし烈な生死を賭けた戦いの産物であつたことが理解できます。相良町や榛原町のまちづくりは、恵まれた土地のどこを居住地にどこを農地に区分けするのかということから始ま

ちの成り立ちとこのまちのまちづくりをお話して来ましたが、この事実を理解していただくことで、私がこの津波防災まちづくりに込めたもう一つの思いを理解していただくこうと考えました。

このまちをつくつてきた先人たちは生活できる町を目指し、汗を流し営々と努力を傾けて自分たちが生活するまちを創り上げ、今や豊かで勢いのある町を目指すまでになりました。私は、豊かで勢いのあるまちに歴史的なまちづくりの経緯から欠落しているもの、すなわち人々を魅せる要素を取り入れたかったのです。

これから津波防災まちづくりは、1丁目1番地とも言うべき漁港を含めた海岸線における津波阻止のハード整備である大井川の堤防や防潮堤のかさ上げ、坂口谷川河口の水門設置などに向けて仕上げの段階に差し掛かりますが、これらのハード完成の暁に「魅せるまち」を創り出そうと考えています。

このまちのまちづくりに欠落している要素を理解していただくために、このま

り、どこに寺や神社を建てるのか、道をどこに通すのかというように始めから計画的にまちづくりを進めることが出来る素地があつたのです。しかし本町のまちづくりは、暴れ川である大井川の流域を渇水期に、最初は食糧を確保するための農地を広げていきやすいところを見つけていることから始まったはずであり、どこを居住地にどこを農地にしようかといった計画的なまちづくりを進める余地はなかつたのではないのでしょうか。

それ故、まちづくりは手を付けられるところから始まり、計画的なまちづくりなど論外だったのでしよう。

このようなまちづくりの経緯をたどれば、相良町や榛原町には由緒ある寺や神社、城や郡役所といった建造物が建てられたり置かれた理由が理解でき、文化的な歴史を見て取れますが、本町のそれは両町に比べて見劣りするのほまちづくりのスタートから全く違ったものであつたことに由来しています。

今年の正月に川勝平太静岡県知事とお会いし、このまちの海岸線における津波対策についてお話しした際、私から、知事が富士山静岡空港周辺地域を対象として提唱された「Sea Garden City」(シーガーデンシティ)を創っていきたくないと申し上げたところ、知事は大いに喜ばれ、手をたいてエールを送ってくれました。このまちが今取り組んでいるまちづくりの先に「Sea Garden City」があり、「魅せるまち」づくりにつながります。

町民の皆さんはもちろんのこと、町外の皆さんをも魅了し、この町を訪れ海を眺めて至福の時間を過ごすことのできるような「魅せるまち」を海岸線に創り出したいと考えています。豊かで勢いがあり、心を魅了する吉田町を創りましょう。

このまちのまちづくりに欠落している要素を理解していただくために、このま